

お遍路さんはどのような人たちか — 2011年聞き取り調査より — What sorts of people make the Shikoku Pilgrimage? From interviews conducted in 2011

竹 川 郁 雄
Ikuo Takekawa

For the person who worked as Shikoku pilgrim, I carried out hearing investigation in the parking lot which reached the Hanta temple. The investigation man-hour was 67 hours from 7:00 to 17:00 in act, enforcement time for seven days of the latter half of March, 2011 for a period. As a result, the person who made a pilgrimage to the Hanta temple as pilgrim was 1,456 people, and 493 people (the number of the effective investigation) answered hearing investigation.

Higher than 60's hold 64% according to the generation, and, the teenage person were 2.2%, the person of 20 generations were 5.5%, and it cannot be said that youths increase.

The ratio to use a privately-owned car was 45.0% by 2006(spring) investigation and increased to 59.5% by 2007, and to 62.1% by 2011 and people using a privately-owned car increase. About the question item which asked the purpose of the pilgrim, because the people who chose "I opposite to the way of life of oneself" increased in particular by investigation in 2011, it exceeded in the question item of "faith". This tendency becomes remarkable with a person of 50 generations. About the question item which asked faith and a thing of the transcendence, the person of the walk pilgrim tends to be this world affirmation-like and not to accept life after death. When I asked person without a walk pilgrim whether they want to do a walk pilgrim or not, the person who want to do a pilgrim walks were at a great many 81.8% and I understand that demand to the pilgrim is big.

はじめに

四国遍路に関する近年の書物を見ると、「最近ではお年寄りだけでなく若者たちの心もとらえ、一人歩きの人も多くなって」いるという（真鍋俊照 2010:3）。一方で、「「パック遍路」と呼ばれる商品化された遍路が現れたが、回数を重ねるごとに参加者が減っている」という（頼富本宏 2009:23）。四国遍路について、正確なところを知りたいところだが、四国遍路はそもそも個人の自発的な意志で始められ、88カ所の札所をめぐる行程は1200 kmから1400 kmに及ぶ自由な道であり、時間的な制限もないという、何とも特定のしにくい一連の社会的行為からなる現象である。

そのような現代の四国遍路が、どのような人たちによってどのような目的で行われているのか、その現状を実証的に明らかにすることは、四国遍路が現代人にとって魅力あることがらであり、四国の活性化にも資するであろうから、やはり重要なことだと考え、定点調査を試みた。筆者は、四国遍路の現状を探るべく、2006年及び2007年に50番札所繁多寺前の駐車場で札所を巡る人々に対して聞き取り調査を実施したが、さらに2011年の3月に若干質問項目を変えて聞き取り調査を実施した。その調査結果について、本稿で報告・考察する。

1 2011年実施の聞き取り調査について

これまで実施した調査を継続させて、繁多寺境内に至る駐車場で聞き取り調査を行った。この調査で対象となる人は、四国遍路をする人であり、大多数の人は白装束や長旅の出で立ちで外見的に判断できるが、繁多寺に来る人たちにはそれ以外に、犬や子どもを連れて散歩に来る人、近所に住み遍路とは関係なくお参りに来る人、業者や寺への所要で来る人、寺の関係者などがある。そうした人たちと区別するために、聞き取り調査依頼の際に「お遍路さんへのアンケートのお願いです」と話して、本人の判断により「お遍路さんではない」との返答があれば、調査対象からそれらの人たちを除外した。従って、ここでの調査対象者は、自分を四国遍路をしているとみなしている人たちということになる。

本研究において、四国遍路をする人々を、四国88カ所の札所を巡礼する人々と広義に定義しておく。多くの人々は遍路の意識、すなわち弘法大師信仰に帰依して札所霊場の巡礼を行おうとする意識を持っており、それが本来の四国遍路（狭義の意味）であろうが、そのような意識が明確にないまま巡礼行為をする人もいるであろう。あくまで本人の判断であるので、この中には、マス・メディアの情報から急にお遍路を始めようと思い立った人、各札所の朱印と墨書を集めることだけが関心の人、すべての札所を歩き通すことが目標の人、観光と兼ねて訪れる人、定年退職を機に四国遍路をしようと考えた人、修行や精神修養で行く人、純粋な信仰心で巡る人などさまざまな人を含むこととなる。「四国在住の人びとは今でも自宅近くから巡り始めることが圧倒的に多い」（星野英紀・浅川泰宏 2011:29）のであり、巡る順序にもこだわらないのである。このようにそれぞれ各人が抱く遍路のイメージを持ち、そこから自分の行為を遍路かどうか判断している。遍路のイメージの共通項として、実際にできるかどうかは別にして、88カ所の札所霊場をすべて巡るということがあるだろう。札所を巡る理由はどうであれ、自己をお遍路さんとみなしている人たちを本調査は対象としている。

本稿での考察は、第3回目の2011年春に実施した調査のデータを主に対象とするが、必要に応じてこれまで2回実施した際のデータを参考にする。聞き取り調査は、第1回目が2006年3月17、23、27、28日、4月7、14日の6日間実施し、有効調査数は461人であった。第2回目は2007年9月21日～28日（26日を除く）の7日間実施し、有効調査数は574人であった。第3回目の調査は、2011年3月17、18、19、20、22、23、25の7日間の7日間行い、実施時間は7時から17時（20日のみ雨天のため14時まで）まで、繁多寺での納経が可能な時間帯に実施し、調査延べ時間は67時間であった。この時間帯に、観察員が駐車場に待機し、通過するお遍路さんの人数を記録することも、聞き取り調査の実施と併せて行った。その結果、お遍路さんとして繁多寺を巡礼した人は1,456人で、そのうち聞き取り調査に答えてくれた人は493人（有効調査数）であった。2006年、2007年、2011年と3回にわたる聞き取り調査の有効調査数の合計は、1,528人であった。

2 四国遍路をする人々の実態

四国遍路をする人々について、目視による人・車・バスの記録、男女の比率、年代、出身の都道府県、利用する交通手段、お接待の経験、般若心経を唱えるかどうかについて、収集したデータよりその傾向を探ってみる。ここでは、2011年春に調査したデータを中心にして、3回の調査を比較しながら検討していくこととする。

(1) 繁多寺を巡礼した人・車・バスの記録

表1は時間帯ごとの人数を記録したもので、日にちによる変動が大きいことがわかる。この記録では、繁多寺を巡礼した人は延べ1456人、車は407台、バスは27台となっている。土曜、日曜の巡礼者が多く、3月19日土曜は、人378人、車106台、バス5台で、一番少ない3月22日火曜日では人107人、車56台、バス0台と大きく違っている。1台のバスに乗っているお遍路さんの人数もさまざまであるが、やはりバス乗客者の人数は多いので、その日にバスが何台くるかで巡礼者の数は大きく左右されることになる。お遍路さんの来る時間帯については、13時、14時台が多く、それ以後は急に少なくなる。巡礼する人たちの遍路計画や交通手段によって、札所を訪れる時間帯が決まってくると考えられ、順打ちの場合次の石手寺は道後温泉に近くそこで宿泊する予定の人が多いために、13時から14時代に多くなるのであろう。

表1 繁多寺を巡礼した人・車・バスの数（観察員の目視による）

	3/17木	3/18金	3/19土	3/20日	3/22火	3/23木	3/25金	計
7時 人	34	3	8	3	4	2	1	55
車	6	2	3	2	3	2	1	19
バス	2	0	0	0	0	0	0	2
8時 人	12	8	12	51	20	3	15	121
車	8	2	5	14	9	2	5	45
バス	0	0	0	1	0	0	0	1
9時 人	22	10	23	57	20	7	46	185
車	7	4	11	17	9	3	3	54
バス	0	0	0	1	0	0	2	3
10時 人	13	23	27	42	21	18	11	155
車	7	3	10	17	11	3	5	56
バス	0	2	0	1	0	0	0	3
11時 人	14	4	22	68	15	48	8	179
車	6	3	11	18	9	5	5	57
バス	0	0	1	1	0	2	0	4
12時 人	12	4	42	34	7	5	4	108
車	8	2	15	15	5	3	2	50
バス	0	0	0	0	0	0	0	0
13時 人	30	59	61	42	14	6	2	214
車	5	4	20	19	7	1	1	57
バス	1	2	0	0	0	0	0	3
14時 人	9	11	95		5	4	88	212
車	2	4	12		3	0	6	27
バス	0	0	2		0	0	5	7
15時 人	23	12	64		1	29	33	162
車	2	6	10		0	5	1	24
バス	1	0	2		0	1	0	4
16時 人	1	12	24		0	17	12	66
車	1	2	9		0	0	6	18
バス	0	0	0		0	0	0	0
人	170	146	378	297	107	139	220	1457
計 車	52	32	106	102	56	24	35	407
バス	4	4	5	4	0	3	7	27

(2) 男女の比率

男女の比率について述べると、2006年春調査では、男性53.5%、女性46.5%で、2007年秋調査では、男性58.5%、女性41.5%であり、あとの調査で男性がやや増加している。2011年春の調査では、男性51.5%、女性48.5%で男性がわずかに多くなっている。3回をあわせたデータでは、男性54.8%、女性45.2%で、繁多寺における聞き取り調査では一貫して男性の方が若干多いという結果であった。

しかしながら、2011年に初めて実施した観察員の目視記録による1,456名の男女比率は、男性48.4%、女性51.6%で、女性の方が多くなっている。このことについて、調査の当日の状況から考えてみると、団体バスの巡礼者は、先達さんやバス搭乗員の指示により行動するため時間に追われて急いでおり聞き取り調査を行えない場合が多く、団体バスに女性が多いために起こってくることでありと考えられる。2011年春の聞き取り調査では、団体バスは男性29.0%(20人)、女性71.0%(49人)となっていて女性の方が非常に多い。また、目視による判断では、近隣の散策者やお寺へのお参り人など、札所を巡るお遍路さんでない人をカウントしている可能性があり、そのことによる不一致が生じていることも考えられる。観察員の黙示による男女の判断の方が、およそ3人に1人が受け入れた聞き取り調査の結果よりも、現状に即しているであろうから、2011年春の調査においては女性の方がわずかに多いと判断することとする。

(3) 遍路する人の年代比率

2011年春調査では、10代2.2%(11人)、20代5.5%(27人)、30代5.5%(27人)、40代7.7%(38人)、50代15.2%(75人)、60代43.8%(216人)、70代以上20.2%(99人)であった。60代は43.8%ともっとも高い比率を占めているが、2006年春の調査では46.4%とさらに高く、2007年秋の調査では35.7%とやや低くなっている。春に60代の人が多いことが推測される。

若い人たちについては、2011年春の調査において、10代で若干増えており(2.2%、11人)、2006年春(0.7%、3人)、2007年秋(0.9%、5人)より多い。20代ではあまり変わりはない(2011年春(5.5%、27人)、2006年春(4.6%、21人)、2007年秋(6.0%、34人))。目視による通過者の記録では、30代までの人数は172人で、総数1,456人に対する比率は11.8%となっており、この調査で見える限り若者遍路が増えたとは言えないであろう。目視による年代の判定はむずかしく、30代未満か、40代以上かの判断にとどめることにした。

2011年調査では、60代以上が63.9%を占めており、お遍路さんの6割以上が高齢者という傾向は以前の調査と同じである。

(4) 出身の都道府県

次に、「どちらから来ましたか」と出身の都道府県を尋ねた質問である。2011年春調査では、多いもの順に、1.愛媛(55人)、2.香川、兵庫、福岡(41人)、5.大阪(36人)、6.広島(31人)、7.愛知(27人)、8.高知、長崎、東京、神奈川(14人)となっている。今回団体バスのアンケート回答者が多くなったとみられる福岡と長崎で人数が多くなっているが、四国4県と大都市部を擁する7つの都府県が、328人で全体の66.5%と3分の2を占めている。3回の調査の合計では、1.愛媛(170人)、2.大阪(130人)、3.愛知(111人)、4.香川(107人)、5.兵庫(106人)、6.広島(83人)、7.徳島、福岡(67人)、9.岡山(62人)、10.東京(47人)となっている。

このように四国と都市部を擁する都府県からの巡礼者が多いものの、巡礼者の出身都道府県は広く全国に分散している。繁多寺で3回実施した聞き取り調査で、まったくお遍路さんが来ていない県は、岩手と青森であった。次に少ない県は、3名の山梨、福井、秋田となっており、広く全国から巡礼者が来ているとみなしうるであろう。

調査結果の中で気になるのは愛知県の巡礼者が多いことである。愛知県には、知多四国八十八ヶ所霊場があり、全行程194kmの「遍路ミニチュア版」から、さらに四国遍路へと誘われるのだと考えられる。また、福岡県には、篠栗四国八十八カ所があり、同様にそこからさらに四国遍路へと導かれるのであろう。

(5) 利用する交通手段について

利用する交通手段の比率は、3度の聞き取り調査の合計で、自家用車55.9%、団体バス18.9%、徒歩11.4%、マイクロバス4.3%、タクシー3.3%、バスや鉄道2.0%、バイクあるいは自転車2.7%となっている。歩き遍路が1割強を占めている。

自家用車については、2006年春調査で45.0%(205人)であったのが、2007年秋調査では59.5%(330人)、2011年春調査では62.1%(306人)と増えており、自家用車を利用する人が増加している。それ以外では、団体バス(20.9%(96人)→21.6%(120人)→14.0%(69人))は秋に多く、徒歩(13.2%(60人)→7.3%(41人)→14.2%(70人))は春に多く、マイクロバス(9.3%(43人)→2.1%(12人)→1.8%(9人))とタクシー(6.3%(29人)→3.4%(19人)→0.4%(2人))は、2011年春にかなり減少している。3回にわたる調査において、自家用車による四国遍路が増える傾向にあることを示している。

(6) お接待の経験

2011年春の調査で新しく設定した項目として、お接待を受けた経験や般若心経を唱えることについての質問がある。お接待を受けたことが「ある」人が76.1%(367人)、「ない」人が23.9%(115人)であった。遍路途中で何らかのお接待を受ける機会があるのではないかと思われるのだが、2割以上の人がないと回答している。年代別では40代(31.6%)、交通手段では自家用車(29.5%)において、ないと回答している人が多い。歩き遍路では、92.9%(70人中65人)があると回答している。(5人はないと回答している)

(7) 般若心経を札所霊場でとなえるかどうか

般若心経は、「大乘仏教の教えがそのまま記されているお経ですから、宗派を越えた経典です。僧侶を問わず、これほど尊ばれてきた経典は他にはありません。」(『NHK趣味悠々 四国八十八カ所初めてのお遍路』日本出版放送協会、2006:96)と、般若心経をとなえることが今日では一般化していると言える。

聞き取り調査の集計では、「必ずとなえる」が72.6%(355人)、「となえる時もある」が13.7%(67人)、「となえない(知らない)」が13.7%(67人)であった。男女ではほとんど差がなかった。年代別では、20代が特に低く37.0%(27人中10人)、一番高かったのは10代であるが、10代は回答者が11人でそのうち9人が「必ずとなえる」となっていて全体数が少なく、また大人と一緒に来ているであろうからその人たちと一緒にとなえるのだと思われる。次には70代、次いで60代となっている。

交通手段別では、自家用車67.0%、団体バス92.3%、徒歩80.0%で団体バスがもっとも高くなっている。（他の交通手段は人数が非常に少ないので考察からはずした。）

団体バスでお遍路する人たちは、特に四国遍路ツアーの場合、札所に着くまでの間バスの中で地域の人との接触もなく過ごすので、札所霊場内でのお参りが一番主要な行動となる。その際、時間の短縮を図ることとサービスのために、バスの添乗員が納経帳などを預かって納経所での納経作業を代行しているのがほとんどである。そうすると、札所霊場に着いてから行う一連の参拝作法、一般的には1.山門で合掌、一礼、2.手水場で手と口を清める、3.本堂と太子堂でろうそくや線香を立て、納め札とお賽銭を納める、そして4.般若心経をとこなえるということは、遍路行為の中心をなし、特に先達の音頭によってそれぞれ声を出して般若心経等のお経をとこなえることが、行程中もっとも意義のある行事となる。

先達が先導する場合には、本堂と太子堂の前でそれぞれ唱えるので、1つの札所霊場で2回唱えることになり、1日で多数の札所霊場を回る場合には何度も唱えることとなる。従って、団体バスのお遍路さんの92.3%が般若心経を「必ずとこなえる」と回答しているのはもっともなことだと言えよう。「とこなえない（知らない）」と回答していた人は、団体バスでは65人中1人1.5%であったが、自家用車では306人中51人16.7%とやや多くなっている。インターネットのブログでのウメキトシユキさんによる「はじめての四国遍路バスツアー体験記」によれば、バス内で先達によるお勤めがあり般若心経も唱え、1日で28回お経をあげたと書かれており、88カ所を通しで回るバスツアーなどでは必ずしも信仰心に厚い人でなくとも、次第に般若心経が熱心に唱えられていくことが予想される。

3 四国遍路をする人々の意識

次に四国遍路をする人々の意識がどのようなものか、遍路の目的や信心に関する意識などの質問から探ってみよう。

(1) 遍路の目的について

「あなたはどんな目的で遍路をしていますか、そう思うものいくつかでも○をしてください。」と、12の選択肢をあげ複数回答が可能な形で質問した。（表2）

3回の調査を合計した集計では、1番選択されたものが「先祖・死者の供養」38.2%、2番目「健康のため」29.5%、3番目「祈願(大願成就)」23.2%、4番目「精神修養」20.2%、5番目「自分の生き方と向かい合うため」13.9%と「その他」13.9%、7番目「信仰」13.5%、8番目「観光」11.2%、9番目「チャレンジ」8.3%、10番目「人との交流」7.7%、11番目「病気の治療・治癒」7.4%、12番目「悩みから自分を解き放ちたいため」2.9%であった。

「先祖・死者の供養」は3人に1人以上が選択しており、最も多い遍路の目的となっている。それに対して、一般に宗教的行為に関連が深いとみられる「信仰」は、13.5%の人が選択し7番目となっており、多いとは言えないであろう。「信仰」という選択肢は、組織宗教との結びつきを連想させるためか遍路の目的として掲げない人が多いようである。

それに対し、「自分の生き方と向かい合う」を選択した者が2011年春の調査で増えているために（2006年春14.1%、2007年秋8.0%、2011年春20.7%）、3回の調査であまり変化のない「信仰」を合計で上回っている。「自分の生き方と向かい合う」は2007年秋の調査より12.7%の増加であり、他のどの

項目よりも増え方が大きい。

表2 遍路の目的(多重回答) (%は聞き取り調査対象者数の百分率)

	2006年春	2007年秋	2011年春	合計したもの
1. 先祖・死者の供養	39.3%(181)	34.0%(195)	42.08%(207)	38.2%(583)
2. 健康のため	31.0%(143)	25.8%(148)	32.53%(160)	29.5%(451)
3. 祈願(大願成就)	18.0%(83)	24.6%(141)	26.4%(130)	23.2%(354)
4. 精神修養	22.1%(102)	14.3%(82)	25.4%(125)	20.2%(309)
5. 自分の生き方と向き合う	14.1%(65)	8.0%(46)	20.7%(102)	13.9%(213)
6. 信仰	14.3%(66)	12.9%(74)	13.4%(66)	13.5%(206)
7. 観光	8.7%(40)	12.4%(71)	12.2%(60)	11.2%(171)
8. チャレンジ	9.1%(42)	3.8%(22)	12.8%(63)	8.3%(127)
9. 人との交流	7.6%(35)	3.7%(21)	12.4%(61)	7.7%(117)
10. 病気の治療(治癒)	5.6%(26)	8.4%(48)	7.9%(39)	7.4%(113)
11. 悩みから自分を解放したい	3.0%(14)	1.6%(9)	4.3%(21)	2.9%(44)
12. その他()	11.5%(53)	19.3%(111)	9.9%(49)	13.9%(213)
聞き取り調査対象者数	計461名	計574名	計493名	計1528名

3度目の調査期間は、前に示したように2011年3月17日から25日であり、1週間ほど前に東日本大震災が発生している。この惨状をテレビなどで知らない人はいないであろうから、四国遍路をしている人も、それを知って意識上の変化が生じていることが考えられる。『プレジデント』掲載の「震災後の仕事観、人生観に関するアンケート」によれば、「震災後、仕事観に変化があったか？」の質問に対し、54.5%の人が「変化あり」と回答しているとあり、当初の遍路の目的において、「自分の生き方と向き合う」ということが意識されていなくても、この聞き取り調査に回答する時に震災の情報を知って、改めて「自分の生き方と向き合う」という思いが抱かれているのではないだろうか。

調査年を経るにつれて比率が増えているのは、「祈願(大願成就)」(18.0%→24.6%→26.2%)、「観光」(8.7%→12.4%→12.4%)である。これらが今後も増加するかどうかはさらに調べていく必要がある。

(2) 年代別に見た遍路の目的

次に遍路の目的を遍路する人の年代別で見ると、それぞれの年代相応の目的が選択されている。70代以上では、半数近くの人(49.5%)が「先祖・死者の供養」を選んでいる。40代から60代では、70代の人ほどではないが40%以上の人が遍路の目的の中で一番多く選んでいる。30代では4番目となり、10代と20代では6番目となっている。

表3 年代別遍路の目的 (2011年春)

	10代と20代	30代	40代	50代	60代	70代以上
	38	27	38	75	216	99
先祖・死者の供養	15.8	25.9	42.1	42.7	44.9	49.5
	6	7	16	32	97	49
健康のため	7.9	14.8	15.8	28.0	36.6	47.5
	3	4	6	21	79	47
祈願（大願成就）	39.5	29.6	28.9	29.3	24.1	22.2
	15	8	11	22	52	22
精神修養	31.6	44.4	28.9	17.3	24.1	25.3
	12	12	11	13	52	25
信仰	7.9	11.1	26.3	14.7	11.1	15.2
	3	3	10	11	24	15
観光	31.6	33.3	10.5	17.3	8.3	4.0
	12	9	4	13	18	4
自分の生き方と 向かい合うため	26.3	18.5	26.3	30.7	19.9	11.1
	10	5	10	23	43	11
病気の治療（治癒）	2.6	7.4	5.3	8.0	7.9	11.1
	1	2	2	6	17	11
チャレンジ	23.7	14.8	7.9	4.0	11.1	20.2
	9	4	3	3	24	20
人との交流	7.9	14.8	13.2	8.0	13.4	14.1
	3	4	5	6	29	14
悩みから自分を 解放するため	7.9	7.4	5.3	6.7	3.2	2.0
	3	2	2	5	7	2

「健康のため」も同様の傾向が出ており、年配の人に多く選ばれる傾向がある。これらの傾向は、2006年春や2007年秋の調査よりも顕著なものとなっている。30代までの人では、「精神修養」「祈願（大願成就）」「観光」が多く選ばれる傾向があり、「信仰」「人との交流」「悩みから自分を解放するため」「病気の治療」「健康のため」は、少数の人からしか選択されていない。

特に多いとみられるのが、50代の「自分の生き方と向かい合うため」で、30.7%の人から選択され「先祖・死者の供養」に次いで2番目となっている。逆に50代では、「チャレンジ」が4.0%と世代間で一番低い比率となっている。傾向として、回答者数の少ないために個人のばらつきが出ていると思われる10、20代以外は、「自分の生き方と向かい合うため」が高いほど、「チャレンジ」が低くなっている。特に50代は、「人との交流」も低くなっており、自己の内面に向かう意識が50代頃に強くなるのではないかと考えられる。

(3) 「自分のいのち（生命）は、目に見えない大きな力によって与えられたのだと感じる。」についてこの質問について「そう思う」の回答は、91.9%（442人）で、9割以上の人「そう思う」と回答

している。これを年齢別で見ると、若い層（10代81.8%、20代70.4%、30代84.0%）で肯定者が少なく、年配層（40代94.6%、50代91.9%、60代94.3%、70代以上94.8%）で高くなっている。交通手段別では、自家用車94.6%、団体バス97.0%、徒歩87.1%となっていて、団体バスによる人たちが、非常に高くなっている。バスツアー体験記等によれば、バスで札所霊場に向かう間、信心を促すビデオを見ることがあり、それによってこの質問に肯定的となる意識が高まることが考えられる。徒歩の人は、他の交通手段よりやや低く、他力的な力の存在を認めない傾向があるとみられる。徒歩の人はパーソナリティとして自主独立心の強い人が多いのか、あるいは今行っている歩きという行為がそのような意識を高めるのであろう。

遍路目的との関連を見てみると、「自分のいのち（生命）は、目に見えない大きな力によって与えられたのだと感じる」にそう思わない人は、そう思う人より遍路目的に「観光」や「チャレンジ」を選ぶ傾向がある。逆に、そう思う人は、「健康」を選ぶ傾向がある。

(4) 「この世（現世）の幸せが来世や天国で得られる救いよりも大切である」について

「そう思う」の回答は78.0%（336人）、「そう思わない」の回答は22.0%（95人）で、無回答の人が62人（全体の12.6%）おり、答えるのがむずかしい質問であったことがわかる。年代別では、回答の傾向がV字型、つまり中間の40代で低くなっている（10代81.8%、20代69.6%、30代65.2%、40代60.6%、50代78.5%、60代78.5%、70代以上87.8%）。年を経るに従って、来世志向となりそうだが、50、60、70年代となるに従って、現世肯定的の傾向が出ている。交通手段別では、自家用車77.7%、団体バス81.4%、徒歩82.3%であった。徒歩による人たちの方が、現世肯定的になっている。

遍路目的との関連では、「この世（現世）の幸せが来世や天国で得られる救いよりも大切である」と思う人は、遍路目的に現実的な「健康」を選び、そう思わない人は「修養」、つまり未来に向かって自分を鍛えるというような目的を選ぶ傾向が出ている。

(5) 「私には死後の世界があるように思える」と言う人の意見についてどう思いますか」について

「そう思う」の回答は、73.5%（313人）であった。この質問も67人（全体で13.6%）が無回答で、答えるのがむずかしい質問であったことがわかる。年齢別では一定の傾向は見られなかった。交通手段別では、自家用車78.4%、団体バス78.6%、徒歩55.7%、となっており、自家用車および団体バスと、徒歩の間でかなりの差がある。徒歩による巡礼の方が、死後の世界を認めないと思う人が多くなっており、ここでも、現実的あるいは現世中心的な傾向が出ている。

以上の3つの質問への回答では、女性の方が「自分のいのち（生命）は、目に見えない大きな力によって与えられた」及び「私には死後の世界があるように思える」と回答する傾向が見られる。女性の方が精神世界への関心を持つ人が多い、という傾向があらわれている。「この世（現世）の幸せが来世や天国で得られる救いよりも大切である」については、男女差は少なく、現世利益の考えは男女で違わないようである。

(6) 「（歩き遍路でない人に）歩き遍路をしたいと思いますか」について

「したい」と回答した人は、81.8%（336人中275人、したくない人61人）であった。8割以上の人々が、歩き遍路をしたいと思いますと回答しており、人気の高いのがうかがえる。そのうち、歩き遍路を「できない

と思う」と回答した人が、69.7%（254人中177人、できる76人）であった。「歩き遍路をしたいと思っているが、できないと回答している人」は、全体（493人－歩き70人＝423人）の41.8%もあり、これらの人たちに歩き遍路の一部でも経験できるようにすることが望ましいのではないかと思われる。

(7) 遍路回数の多い人(70人)について

聞き取り調査では、今回の遍路が何回目か尋ねている。四国遍路の紀行書には、「素晴らしい自然や親切な四国の人びとに接して、多くのことを見たり、聞いたり、感じたりした」（武藤暢夫 2000:7）などと書いている人が多く、四国遍路の魅力にとりつかれて何度も回る人がいる。調査において一番多い人は158回目と記入されており、次いで92回目、78回目、71回目、57回目が本調査で記入された多い回数であった。2回以上四国遍路をしている人は調査対象者493人のうち70人で、この人たちを「2回目の人」グループ（21人）、「3から9回目の人」グループ（35人）、「10回目以上の人」グループ（14人）と3つに分け、聞き取り調査の質問にどのように回答しているか検討する。

70人のうち、男性は45人（64.3%）、女性は25人（35.7%）で男性の方がかなり多くなっている。年代別にみると、60代が32人（45.7%）と最も多く、「10回目以上の人」14人中6人が70代以上で、交通手段別では、自家用車が40人（57.1%）で最も多く、これは全体の傾向と同じだが、次いで多いのが歩き遍路の13人（18.6%）、団体バス8人（11.4%）、特徴的なのがマイクロバス5人（7.1%）で全体の1.8%より多くなっている。

般若心経を必ずとなえる人の比率は遍路回数の多い人ほど多くなり、10回目以上のグループでは、「信仰」（64.3% 14人中9人）を選択する人が多くなっている。遍路回数が多くなるほど、次第に遍路作法に従って般若心経をとなえ遍路目的として「信仰」を選ぶ意識が強くなるのであろう。

また、遍路回数の多い人ほど、「人との交流」を選択する傾向がでていいる。「人との交流」は、年代別で一定の傾向をうかがうことはできなかったが、遍路回数の多い人ほど遍路の目的として選択されている。

「自分のいのちは大きな力によって与えられた」については、遍路回数の多くなるほど「そう思う」と回答する人が増え、10回目以上のグループでは全員が「そう思う」と回答している。逆に、「この世の幸せが来世の救いより大切」では、遍路回数の多いグループほど、「そう思う」と回答している人が減っており、来世志向がうかがえる。

おわりに

お遍路さんに聞き取り調査を実施して得られたデータより、実態と意識についての傾向をみてきた。最初に述べたように、お遍路さんがどのような人たちであるかはある時点に限っても容易に一般化できることではない。調査の手法により、またお遍路さんのとらえ方により、集計数値は異なってくる。さらに、お遍路さんの実態そのものが時代の変動とともに変化するであろう。2011年3月11日に発生した東日本大震災は、四国遍路をする人びとの実態と意識の両面に大きく影響することが考えられる。そうした影響を考慮に入れつつ、可能な限り現象に潜む一般化できる要因を探りだしていくことが重要であろう。

参考文献

- 星野英紀・浅川泰宏、2011年、『四国遍路 ささまざまな祈りの世界』、吉川弘文館
- 飯島裕子、「震災後の仕事観、人生観に関するアンケート」、『プレジデント』2011年9月12日号、118-9頁。（アンケートは2011年6月実施、回答者総数1377人）
- 真鍋俊照、2010年、『四国遍路を考える』、NHK出版
- 武藤暢夫、2000年、『四国歩き遍路の旅 「定年」三百万歩の再出発』、MBC21
- 頼富本宏、2009年、『四国遍路とは何か』、角川学芸出版



青柳かおる氏報告



森正人氏報告



竹川郁雄氏報告



内田九州男氏報告